

# 愛媛大学図書館 鈴鹿文庫貴重書展

期間 平成30年10月17日(水)～平成30年11月12日(月)  
10:00～16:30 (入館は16:00まで) ※火曜休館

会場 愛媛大学ミュージアム エントランスホール

## ご挨拶

鈴鹿文庫は、京都にある吉田神社の社家で、吉田家の家老的役割を担っていた鈴鹿家の流れに位置する鈴鹿三七蒐集のコレクションです。鈴鹿三七の書物に対する真摯な研究態度にもとづく集書がなされた結果の独特な文庫内容になっており、稀書が多いことでも注目されています。すでに愛媛大学図書館ホームページに「貴重書展示」のひとつとして、その概要、書名一覧等を公開しています。約850点の画像データも閲覧可能です。全資料の画像データが閲覧できればよいのですが、7,000点余りの膨大なコレクションの全貌をお示しするにはまだ時間を要します。そこで、今回は日本近世文学会秋季大会が愛媛大学で開催されるのに合わせて、近世関係の資料に焦点をあてた展示を企画しました。2006年秋に開催された「鈴鹿文庫の貴重書—900年前の書物が語るもの—」、2016年秋の中世文学会時に開催された「愛媛大学鈴鹿文庫展観」に次ぐ、3回目の展示となります。

展示品は『徒然草』の作者「兼好」にまつわる驚きの資料、『方丈記』の享受を考えるうえで注目すべき『方丈記』の写本、桂園派の近世和歌資料、京都の年中行事を記した『日次紀事』、平安時代に成立した漢和辞書『新撰字鏡』の副本など。『日次記事』は鈴鹿三七の補訂により原形態を伝える貴重品。「古典書写伝来の家」と呼ばれた鈴鹿家の仕事として特筆に値する『新撰字鏡』は、非常に厳密な副本として作成されたものですが、今回の展示のための調査で、鈴鹿連胤による仕事であることが確認されました。

書名だけを見ていると珍しさを感じない書物もありますが、鈴鹿三七の集書であるこれらの書物には、それだけではない貴重な情報が付加されています。鈴鹿文庫ならではの特徴的な資料の集積をお楽しみいただければと思います。

なお、今回の展示は日本女子大学教授（元愛媛大学教育学部教授）福田安典先生に監修していただきました。末筆ながらあつく御礼申し上げます。

鈴鹿文庫貴重書展実行委員会(代表)  
愛媛大学図書館長 神楽岡幼子

## 愛媛大学鈴鹿文庫について

愛媛大学の鈴鹿文庫は、鈴鹿三七（1888-1967）の旧蔵書を中心とした文庫である。総数7432点。鈴鹿三七は吉田家の家老であった鈴鹿家の一族で、自身が京都帝国大学出身で京都大学に奉職していたために、京都の神職の色合いの濃い文庫となっている。

三七は明治21年京都生、大正2年京都帝国大学卒業、武道専門学校、大谷大学、京都大学附属図書館嘱託、ノートルダム清心女子大学、皇學館大学を歴任した。代表的編著に『勅板集影』『北村季吟著作集』があり、恩師の吉澤義則の名で出された『日本古刊書目』も知られている。書誌学の大家と表現されることが多いが、本人は「書誌学」ではなく「古書学」を以て自認していた。

愛媛大学に入った経緯及び文庫の概要については、小泉道氏は次のように記している（「「鈴鹿文庫」の設置について—故鈴鹿三七氏蔵書が図書館へ—」『愛媛大学附属図書館報「図書館だより」』4号、昭和53年3月）。

連胤の四代あとが三七氏で、京都大学で国文学を専攻して皇學館教授などを歴任、関西の書誌学の開拓者と称されて関係著書も多く、昭和四十二年に七十九歳で逝去。その夫人が元本学図書館長井手淳二郎先生の令妹に当たるという縁もあって、その蔵書が本学に一括購入（一部寄贈）されることになり、これを「鈴鹿文庫」と称することになったのである。

愛媛大学鈴鹿文庫の概略についても、小泉氏が簡略に紹介されている。すなわち、

- 1、神道・国史関係では、卜部神道の家系なるがゆえに質料とも揃い、「日本書紀」「中臣祓」「古語拾遺」の写本や版本は特筆に値する。
- 2、景樹を中心とする和歌資料。
- 3、物語、小説、日記随筆類の写本、版本。
- 4、書誌学関係。また、各資料の伝来の三七氏自身のメモ。
- 5、その他

の五分類に総括できる。

鈴鹿三七の集書には稀書が多い。いくつか例をあげれば、旧西荘文庫本『日次紀事』、兼葭堂旧蔵の西順自筆『夫木和歌抄抜書』、宋版、春日版、枝直自筆『古今集序』、長雅『奉納千種和歌』、『演義俠義伝』など枚挙にいとまがなく、範囲も日本紀、古語拾遺から狂歌狂詩、桂園歌人の草稿まで幅広い。今回、その全体を展示することは無理ではあるが、幸いに愛媛大学図書館が画像を順次ネット上で公開しているの（<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/SUZUKA/ichiran.html>）、近時まとめて閲覧することができよう。御覧頂きたい。

三七がもっとも影響を受けたのは曾祖父鈴鹿連胤（寛政7（1795）年—明治3（1871）年）であった。鈴鹿家は吉田家の家老であったため、吉田家周辺にはしばしばその名が見られ

るが、その歴代当主の中でも連胤は際立っている。そのことは京都大学附属図書館所蔵の『鈴鹿本今昔物語集』が鈴鹿連胤の旧蔵であるために「鈴鹿本」と呼ばれている事実を例に挙げれば十分であろう。連胤の友人である詩人、北脇淡水の命名による舎号「尚娶舎（しょうけいしゃ）」印が捺された彼のコレクションは日本有数のものである。その大半は現在大和文華館に収まり「鈴鹿文庫」として知られている。愛媛大学鈴鹿文庫は曾祖父を慕った三七の集書であるので、それと区別して「愛媛大学鈴鹿文庫」と呼ばれるが、尚娶舎印が捺された書物も多い。

連胤は本職の神道関係著述はもちろん、香川景樹門下の有力歌人でもあり、コレクターとして多くの人物と交流した。しかし伝記研究に乏しく、詳細を極めるのは曾孫三七の手になる『異本今昔物語抄』（大正9年（1920）刊）に付された「鈴鹿連胤略伝」である。これは連胤没後50年を記念したものである。そのためか、三七の集書は鈴鹿家もしくは連胤を追いかけるような特徴がある。

## 鈴鹿連胤について

鈴鹿三七の集書に大きな影響を与えたのが曾祖父の連胤である。

鈴鹿家の鼻祖が中臣連金（なかとみのむらじかね）の男吉子連で、そのため、連胤も中臣と鈴鹿とを名乗る。寛政7年10月29日に生まれる。父は隆房、母は立入左京亮経康の娘である。幼名を幸松、号は誠斎、舎号は尚娶舎。文化6年（1809）に従五位下、神祇権少祐、同8年に従五位上に進み神祇少祐に転じ、同9年に筑前守、神祇権大祐に進む。ために筑前守を称することも多い。同13年吉田社権祝、正五位下。文政元年（1818）には卜部に改姓。これは亀卜の行事に参加するため中臣姓から卜部へと改めたので、同7年には中臣姓に復している。この改姓、復姓は計四度に及んでいる。同年に従四位下、天保4年（1833）権少副、天保7年に吉田家を致仕し『神社叢録』編纂に専念するが、同9年に従四位上、安政元年（1854）に正四位下、吉田社正禰宜、同年6月吉田社権預、慶応2年（1866）に従三位に進む。鈴鹿家は代々正四位下を最上と定められていたので、連胤は自分が従三位にまで進んだことに大いに感激したと伝えられている。明治3年（1870）11月20日没。享年は表向き76歳であるが実年齢は72歳で、吉田家より成功（いさを）霊神と諡号された。

蔵書家で京都大学附属図書館所蔵の『鈴鹿本今昔物語』が鈴鹿連胤の旧蔵であるために「鈴鹿本」と呼ばれている。また香川景樹の門人であり、吉田家家老としての事蹟も知られている。

## 展示品解説

### 1 『伊勢物語カルタ』 近世中期

読み札 210 枚、取り札 209 枚、一括して桐箱に収納されている。図柄の特徴は古形を残していると思われ、人物描写が多い。

近世期になって西洋文明の影響を受けて「カルタ」が制作されるようになり、『百人一首』をはじめとして『古今和歌集』『伊勢物語』のカルタが作成されるようになった。鈴鹿文庫には数点のカルタが所蔵されている。

### 2 黒川道祐『日次紀事』（貞享年間刊） 刊本 12 冊

『日次紀事』は京都を中心とした年中行事や世相を月次、日次に編集した書物である。そのために歳時記や俳諧などの季語認定に重宝されてきた。しかしながら、出版と同時に絶版となり、写本で伝わってきた。この刊本は三七生存時、二本しか知られておらず、現在も完本は少ない。愛媛大学図書館鈴鹿文庫本は昭和 34 年に鈴鹿三七が購入したもので、原形態が残る数少ないもの。旧西荘文庫（小津桂窓）蔵。黒塗りで消されているところは、どうやら賀茂神社関係などからのクレームに対応したらしく、黒川文庫刊本も同じ削除がなされている。その黒塗りされた箇所は写本によって補訂することができたらしく、本書には鈴鹿三七の付箋補訂がある。その付箋も現在の研究の基本資料となっている。

## 鈴鹿三七と鈴鹿連胤

### 3 鈴鹿三七『異本今昔物語抄 附鈴鹿連胤略伝』 大正 9 年 11 月 鈴鹿三七発行 1 冊

個人蔵。連胤没後 50 年を期して三七が著した。冒頭に連胤の自筆と肖像を掲げ、「尚褻舎」印を捺す。緒言に「自分は菲才でありながら学問を志したのは全くこの曾々父の感化で、積書以遺子孫子孫未必能読と古人がいつたやうに、全く万卷の遺書を紙魚の餌に与へて一読もせぬやうなことでは誠に相済まぬ訳である。…京都神楽岡西麓尚褻舎にて 鈴鹿三七識」と記すことから、その曾々父への追慕の深さがうかがえよう。田中教忠翁の連胤追懐記を合わせ載せるなど、連胤追悼の上梓であったと言ってよい。鈴鹿文庫には「尚褻舎」印を捺したものが認められ、連胤旧蔵本は三七の蔵書形成にとっては重要であった。

本誌は限定 150 部で発行された。展示品は肥田皓三氏より提供を受けた。

#### 4 鈴鹿三七『勅板集影』 昭和5年1月 小林写真製版所出版部刊

「昭和四年十一月 京都帝国大学附属図書館にて 鈴鹿三七識」とある。三七は多くの論文、編纂物、著書を残したが、その代表書が本書。題簽は内藤湖南の揮毫。勅板は天皇の勅命によって刊行された書物のことで、とくに後陽成天皇、後水尾天皇が刊行した十数種の古活字版を言う。三七はそれらの影印を一堂に集めたのである。「古書学」を自認していた三七らしい編纂物で、今に色あせない。同書は昭和61年に臨川書店から補訂複製されている。

### コーナー① —吉田兼好はいなかった—

近年、小川剛生氏より提示された『徒然草』作者の吉田兼好はいなかったとする学説が有力視されている。兼好と「吉田兼好」はまったく関係がない、というより吉田兼好という人物はいなかったという説が提出されているのである。その「捏造」に深く関わったとされるのが吉田兼俱（かねとも）である。鈴鹿は吉田に仕えていたので鈴鹿文庫の中にもこの吉田兼好捏造疑惑資料が所蔵されている。

『神道大意』（兼直）、『神道大意』（兼俱）、『唯一神道名法要集』を合わせて「卜家三部大意」と称されるが（『吉田叢書』）、鈴鹿三七はそのすべてを所有していた。

『神道大意』は『吉田叢書』に拠れば元禄9年11月5日、中臣勝方書写で、兼直・兼俱二代の分をまとめたものであるとのことである。鈴鹿文庫には版本しか所有されていないが、ユニークな伝来を持つ『神道大意抄』が所蔵されている。

『唯一神道名法要集』は吉田神道こそが唯一の神道であるとして血脈（系図）が載せられるが、そこにあり得ない兼好の名前が入れられている。その「捏造」の手法は鮮やかである。また近世期の兼好法師の偽書『種生伝』も鈴鹿文庫には所蔵されている。

#### 1 『神道大意抄』 写本1冊

吉川惟足著。寛文12年(1762)6月25日、惟足が吉田亭で吉田兼連、萩原員従らに兼直『神道大意』を講説した際の大村玄泉の筆記を、同年に不破惟彦が整理したもの。貞享2年(1685)清書本を享保10年(1725)に書写している。吉田兼見は豊国神社創建に際し、孫の兼従を社務職として萩原氏を名乗らせるも、目論見はずれ豊臣は滅亡。後に、兼従は吉田神道の拡大を狙って吉川惟足に道統を伝授した。惟足は返し伝授に努めたが不調に終わった。「此書大ニ参考になるもの也」という三七の付箋はその事情に言及したものか。ちなみに萩原員従は富小路頼直の子で兼従の養子となった。同じく養子となった兼種は木下長嘯子の子。

## 2 『唯一神道名法要集』 写本1冊

鈴鹿三七は、「一異本として資料なり 書込また有用也」とメモしている。享保9年宣桓書写。本書は平安時代の卜部兼延の著述の体裁を取るが兼俱の著述であろう。吉田神道が唯一神道であることを問答体で記述したもの。「唯受一流血脈」として吉田家の系図を記すが、そこに『徒然草』作者の兼好をそつとしのばせた疑惑が、近年小川剛生氏によって提出された。小川氏の著書『兼好法師 徒然草に記されなかった真実』（中公新書、2017年）に図版として使用されたのが本書で、本書には兼俱の「捏造」とも言うべき跡がはっきり認められている。

## 3 『唯一神道大要』 写本1冊

吉田兼見著。兼見は兼右の子。信長、光秀、秀吉、家康に仕え、戦国の激動期をうまく泳ぎ切った。子、梵舜、孫は兼従。本来、吉田家は「日本紀の家」（『太平記』）と呼ばれ、兼方の『積日本紀』編集、兼俱の日本紀講釈、兼見による後陽成帝への講釈が有名で日本紀の慶長勅版にも関わった。鈴鹿家も日本紀関係書物が多く、そのあり方をなぞるように三七も半紙本の刊本を中心として多くの日本紀を蒐集した。三七に『勅板集影』の著があることも偶然ではないであろう。本書は末尾に自筆で「青木永弘書笈」とあり、三七は「神道学者青木永弘手沢本珍重珍重」とメモしている。

## 4 『種生伝』（正徳2年刊） 刊本1冊

近世期に作られた兼好伝。初版は正徳2年(1712)だが、三七の頃は正徳3年版しか知られていなかったらしく、三七の考証メモが残されている。著者は篠田厚敬、偽作『園太暦』を利用し、兼好の恋を盛り込んだ歌物語。本書は「しゅせいでん」「たなおでん」の2種の読み方がなされている。

## コーナー② 異本方丈記の世界

かつて『方丈記』は、嗟峨本をはじめとした近世版本（流布本系）しか知られておらず、古い写本がなかった。そのため鴨長明作を疑う声があった。大正末期に大福光寺から長明自筆とされる『方丈記』（異論がないわけではない）が発見され、伝来が醍醐寺や長明の軌跡と重なるので認められ、現在の底本となっている（広本系）。大福光寺本は、大正15年(1926)4月に国宝に指定され、『方丈記』研究は一気に高まる。

一方で、『方丈記』には異本（略本系）があり、長享本、延徳本、真字本の三本を中心に論じられる。すべて後代の写本で、五大災厄の記述が無く、長明が前面に出ないことが特徴である。鈴鹿三七が略本研究に熱中したのはその『方丈記』研究が高まった時代であった。

以上、整理すれば、

広本系—古本系統（大福光寺本を代表に、多くの活字底本）

流布本系（版本、末尾に和歌があるなどの異同がある）

略本系—真字本（簡略）

長享本（閻魔法皇呵責の条がある）

延徳本（折琴、継琵琶の条がある。宗祇—肖柏という連歌師が伝承）

の五系統があることになる。

そこから、

①広本は長明作、略本は偽作

②広本・略本ともに長明作

という議論が始まり、さらに、②では広本と略本の前後関係が議論される。そこに流布本の位置づけも加わって議論が続いている。

その中で、鈴鹿三七は「異本」『方丈記』を入手する（「異本」は後に略本と言われるようになる）。

そこで三七は後藤丹治、小川寿一、橋本進吉らに頼んで異本『方丈記』を書写してもらい、その本文を手元に集めて独自に校合している。その結果として、この鈴鹿本は独自本文を持つことが判明したらしい。

## 1 『異本方丈記 中原本』 写本1冊

本書は、略本系の本文を持ち、閻魔法皇の記事があるので、基本は長享本系統だが、本文に異同がある。中原本とは、中原武次旧蔵で現所在未詳の「宝永丁亥四年八月十九日 武陽於表二番丁 半日ニ書焉 行年六十八歳 広瀬氏実常」とある異本で、昭和4年に山岸徳平が写し（実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵）、それを同年7月に後藤丹治が写し、のちにそれを鈴鹿三七の依頼で小川寿一が写したものである。

この中原本（鈴鹿本）と略本三本を校合すると、長享本には見えず真字本と延徳本にのみ見える語句が散見している。

さらに、注目すべきは、以下のように鈴鹿本にしか無い字句があることである。

【例】（引用文は適宜用字を改めた）。

鈴鹿本「ここに我、神国のほとり、静なる林の間に、はづかに方丈なる草の庵むすべり」  
→諸本「爰ニ我レ深キ溪ノ頭ニ静ナル林ノ間ニ方丈ナル草ノ庵リヲ結ベリ」（真字本）、  
「爰に我、ふかき谷のほとりに、閑なる草の庵をむすべり」（長享本）、  
「爰にわれ、ふかき谷のほとり、閑なる林の間に、わずかなる方丈の草の庵をむすべり」（延徳本）



鈴鹿本「まなこをよろこばしむる仕度なり。風の声、虫の音、耳に語らわしむる力なり」  
→諸本「眼ヲ悦ば令むル友也。風ノ音虫ノ声、耳ニ随フ指南也」（真字本）  
「眼をよろこばしむる友也。風の声、虫の音、耳にしたかふ力なり」（長享本）  
「眼をよろこばしむる友なる。風の音、虫の声、耳にしたかふしるかなり」（延徳本）。

中原本については、三七の手に入る前の旧蔵者が正保版本との異同のあることを誌している。

鈴鹿本は『碧冲洞叢書』第34輯（昭和38年）に翻刻されている。そして、「第四の略本」と思われたのか、『鴨長明全集』（平成18年）に採録された。

展示では、近世期を代表する流布本『方丈記』（正保4年刊本）と三七みずから校合した研究ノート『異本方丈記校合本』もあわせて出品した。

## 2 『方丈記』（正保4年刊） 刊本1冊

流布本は天文14年（1545）写一条兼良本などの古写本はあるが、嗟峨本をはじめとして近世期の版本として広く流布した。古本（広本）との異同はいくつかあるが、末尾に「月かげは入る山の端もつらかりきたえぬ光を見るよしもがな」の和歌が付されることが特徴である。この和歌は長明のものではなく後人が付加したものと考えられるが、近世期はこの流布本系で『方丈記』は読まれていた。展示品は正保4年（1647）、村上平楽寺刊。

## 3 『異本方丈記校合本』 写本1冊

三七は『方丈記』研究者でもあった。その成果は藤井乙男との共著『国文新訳文庫方丈記』（博多成象堂、1921年）、『詳註訳解竹取物語・土佐日記・方丈記』（藤井乙男、原田恭助、井手淳二郎、鈴鹿三七著、博多成象堂、1932年）に表れている。

展示品は大正11年夏に成立。三七による異本（略本）『方丈記』の校合ノートである。三七は後藤丹治、小川寿一、橋本進吉らに頼んで異本『方丈記』を書写してもらい、その本文を手元に集めて独自に校合している。時代は広本の太福光寺本が発見され、国宝に指定された直後で、三七はその学界の動向に刺激されたものであったと思われる。結果として、吉沢本（大正2年、三七書写）、森本（大正11年写）、延徳本（大正3年、橋本進吉写）、後に中原本が三七の手元に揃った。三七の動きは注目されたく、『碧冲洞叢書』第32輯（昭和38年）、第33輯（昭和38年）、第34輯（昭和38年）、第44輯（昭和39年）で言及されている。

## コーナー③ 一吉田兼俱ほか吉田家の著述 附 増穂残口一

鈴鹿三七は、吉田家の家老であった鈴鹿家の一員であることを意識しており、そのために三七はみずから吉田家関係の書物を蒐集している。吉田家の蔵書は天理図書館吉田文庫が有名で、鈴鹿家自体も大和文華館の鈴鹿文庫が知られているが、それでも三七は吉田家関係の書籍を蒐集したのである。

本展示では三七の蒐集品から、吉田兼俱（かねとも）、兼右（かねみぎ）のものを中心に展示した。兼俱は『徒然草』作者の兼好を「吉田兼好」として一族に組入れた人物、兼右はその子で吉田家発展に功績を残した。

また、三七は吉田家の門人となったユニークな神道者・増穂残口の作品も蒐集。行方不明だった増穂残口の墓を最初に発見したのも三七であった。

### 1 『倭国軍記』 写本1冊

吉田兼俱著『倭国軍記』を山田以文が所持していたもの。以文は連胤の国学の師。さらにこの書は「大正五年夏八月初遊于松山偶獲此書矣 此書者蓋錦所山田以文翁之旧蔵也 郁生識」とあって、三七が大正5年に初めて松山に来たときに入手したものと思われる。

『倭国軍記』は宝徳2年(1450)、吉田兼俱が義政に献じたとされるもので、前半は『日本書紀』の大和武尊、後半は「良将勇士法」の記事を繋げたものである。寛文9年(1669)に版本となっている。鈴鹿本はその版本の写しであろうと思われる。

### 2 『神祇正宗秘要』 写本1冊

天正3年(1575)卜部兼右の奥書本を延宝7年(1679)に書写したもの。連歌師里村昌純手沢本。奥書に「延宝七年二月上旬 法橋昌純」とある。『神祇正宗秘要』は兼名の署名があるが、やはり兼俱の手になるものか。『続群書類従』には異本が収録されている。内容は本地垂迹説を主張したものである。

### 3 『神名帳』 写本2冊

「文龜三年十二月廿六日 卜部兼俱」とある。『神名帳』は全国の神社を記したもので、神祇官による官社帳であったが、後に経典同様の扱いを受けて、蒐集、研究、註解が盛んとなる。本書には、鈴鹿三七のメモがあり、卜部本との比較が記されていることから、三七自身も関心のあった書物であったと思われる。本書は鈴鹿家に伝来したもので、「輪違い鈴鹿氏」の蔵書印がある。

#### 4 『中臣祓抄』 写本1冊

中臣祓は鈴鹿家にとって特別なものであったらしく、鈴鹿文庫には注釈を含めて複数が所蔵されている。中臣祓は大祓詞のことで、祭祀に用いられる祝詞の一つである。展示品は、天文11年(1542)書写。兼雄の署名と花押がある。

#### 増穂残口

江戸時代の神道講釈で異彩を放つ増穂残口(明暦元年(1655)―寛保2年(1742))は思想家としても戯作者としても有名な人物で、著作も多く後世への影響も強い。豊後出身で、似切斎、最中(最仲)、大和とも名乗った。著書の『艶道通鑑』が有名で、神道、思想、色道の面から評価されている。その伝記や生涯は中野三敏『江戸狂者伝』に詳しいが、享保5年頃に吉田家の門人となって朝日神明宮の宮司となった。そのためか鈴鹿文庫には所謂「残口八部書」のうち『異理和理／安者世鏡』(享保元年)『直路の常世草』(享保2年)『神国加魔祓』(享保3年)『つれづれ東雲』(享保3年)『死出の田分言』(享保4年)が所蔵されている。

#### 残口の墓

増穂残口は寛保2年に没した。遺言通り墓所は吉田山東の芝の墓に葬られたが長らく不明となっていた。この墓を発見し、写真付きで報告したのが鈴鹿三七である(「増穂残口墓碑発見」(『清閑』11号、1941年11月)。吉田山東の芝というのは吉田家関係の墓地であった。三七は自家の墓参りのついでに偶然に発見したのであった。

その後再度不明となった残口の墓は、妻の墓とともに、2006年5月に同墓地の無縁の墓石群の中から見付き、京都鹿ヶ谷、住蓮山安楽寺ご住職、伊藤正順師のご厚意により、中野三敏氏、服部仁氏、廣瀬千紗子氏らの尽力で安楽寺あきの墓地に移管、保全されたことは記憶に新しい。

展示では、三七が撮った芝の墓の写真と、現在のあきの墓地の写真を並べた。現在の写真は廣瀬千紗子氏より提供を受けた。

向かって右の墓には「(上部欠損)宮神社／(上部欠損)穂大和源最仲之墓」、向かって左の墓には「増穂最仲妻／小松氏和泉之墓」(表面)、「宝暦八年戊寅九月十八日卒／嗣子／源安仲謹誌」(裏面)とある。

#### 1 『つれづれ東雲』(享保3年刊) 刊本2冊

増穂残口は神道講釈に『徒然草』を扱っていた。本書は「十寸穂最仲」の署名である。残口が増穂姓を名乗り始めたのは享保3年(1718)からで、その時期は残口が吉田神道と接近した時でもあった。吉田神社の記録によれば、残口が朝日神明宮の社職に就いたのは

享保4年3月15日以前のことであり、本書執筆と前後して吉田神社から朝日神明宮の社職継目を許されたと考えられる。本書は、注釈書の形態で各章段の語釈とともに、各段の評論にも及ぶ点が特徴的で、残口の思想が語られている。

残口は「兼好は世をいきどをりたる俗人の遁世者」として扱い、兼好と成忠の娘の恋を「真の恋」と記している(236段)。

## 2 『異理和理／安者世鏡』(享保元年刊) 刊本3冊

署名は「似切斎 残口」、絵は京都の浮世絵師・中路定年。儒者や仏者が神道を我田引水して世を乱していることに対して、その誤りを正したもの。残口流の儒仏批判がもっとも発揮された書である。

神道教化の手段として、各神社に神像を設置すべきとの主張が、残口流の真骨頂であるが、同じ神道者からも攻撃されるほど、当時から賛否両論があった。

三七は本書を昭和19年に古書店より求め愛蔵していたようで、みずから反古表紙をつけ、いくつかの鈴鹿メモを残している。

## 3 『直路の常世草』(享保2年刊) 刊本1冊(上巻のみ)

跋文に「残る口をメ侍る」とあり、署名はない。翌年からは増穂、大和などを名乗るので彼の転換期の著述である。日本主義や神道鼓舞を前面に押し出した作品で、国学や神国といった言葉が散見する。ただその強烈な主張が俗文や戯文で書かれているのも残口の特徴で、近松門左衛門の『国性爺合戦』の和藤内の虎退治を例に神威を説いたり(中巻)、『平家物語』作者行長を日本人の真の例としたり(中巻)と、残口流滑稽が存分に発揮されている。

鈴鹿本は上巻のみの端本であるが、三七は承知のうえで「標本のために求めた」と記しており、三七の蒐集態度を知ることができる。

## コーナー④ 一三七蒐集の稀少本一

### 古典書写伝来の家—『新撰字鏡』の副本—

鈴鹿三七は、曾祖父の連胤を敬慕している。吉田家の豊富な蔵書が「神楽岡文庫」と呼ばれたのに対し、鈴鹿家は「古典書写伝来の家」と呼ばれた。その好例として『新撰字鏡』の副本を展示する。

副本は、原本が焼失することに備えて、虫損の跡までを丁寧に写し取る「職人芸」で、連胤は複数の職人を雇い、『今昔物語』や『新撰字鏡』などの副本を作成したのである。また、三七は稀観書のコレクターでもあった。そのいくつかも合わせて展示する。

## 1 天治本『新撰字鏡』 写本5冊（篇立、巻1、巻2、巻4、巻12）

『新撰字鏡』は昌住撰の12巻の漢和辞書。10世紀初頭に成立し、漢字を部首で分類、その発音や意味を和訓（万葉がな）で説明するという現存最古の辞書で、3000語以上を載せている。抄録本などは見つかったが、長らく完本が確認できなかった。

幕末になって、その天治年間の写本のうちの巻2と巻4を連胤が見つけたことから一気に『新撰字鏡』の研究熱が巻き起こる。後に連胤が残り10巻の所有者を見つけて全容が判明した。明治13年に帝室博物館にまとめて寄贈された。

鈴鹿文庫本は、端本5冊（篇立、巻1、2、4、12）で、「尚髻舎蔵」の印が捺されており、連胤の手による書写である。明治13年に内務省から『新撰字鏡』2冊を献上したことを讃える鈴鹿義鯨（三七の父）宛て有印文書も付されている。すなわち内務省（帝室博物館）に献上する前に作成された副本が本書である。

安政年間の副本だからといって看過してはならない。文字の配置、虫損の跡までを正確に複写するその職人芸には「古典書写伝来の家」と称される面目躍如が見られるであろう。

大和文華館鈴鹿文庫にも尚髻舎印が捺されている巻2と巻4があり、連胤作成の副本であるが、原本を忠実に複写したのは愛媛大学図書館本である。

本書は長く昭和写本として等閑視されてきたが、今回の展示のための調査で連胤作成の副本であることが確認された。

## 2 『伴氏稿目』 写本1冊

連胤周辺は互いの貴重書を書写しあっていた。本書は嘉永3年（1850）7月24日に連胤が書写した、伴信友の著作稿本目録である。伴信友は『今昔物語』に関わった人物で、連胤は親しく交わった。『新撰字鏡』の流布にも関わっている。「右以谷森氏本書写訖」とあり、谷森善臣の所持本を写したと思われる。本書記載分は、『国学者伝記集成』記載分よりは量的には少ないものの、書名に異同があり、『馬射式沿革考』『五国古文書』などの、他文献には見いだしがたい書名が記されている。このような書物が現在に伝わるのも鈴鹿家の「古典書写伝来の家」の功績の一つである。

## 3 『夫木和歌抄抜書』 写本2冊

大阪の連歌師、西順が延宝2年に大部の『夫木和歌抄』の「抜書」を刊行した。本書はその刊行に先立つ自筆本である。旧蔵者は木村兼葭堂他。帙には「夫木和歌抄抜書／如是庵主西順筆／西順は連歌者なるを奇しき詞のうたともをかく抜書せし心しらひ感するにたへたり今の和歌専門といはるゝ人此厚恩志あること少からん／丁酉晩秋応田村桑畝嘱／蓬菴（「蓬菴」の印）」とある。蓬菴は、当時の大阪歌壇の古老で明治35年に72歳で没した久保田蓬庵で、伊達千広や近藤芳樹らに和歌を学び、絵や俳諧や裏千家にも通じ、毎年の浪速踊りを制作するなど風流文士であった。その蓬庵から幾人かの手を経て鈴鹿三七の手に渡ったものと思われる。

#### 4 『狂歌百鬼夜興』（文政12年刊） 刊本1冊

菊廼屋真恵美編。呑舟、すみ丸、真恵美らの京都の狂歌師が荒れ果てた寺で「百物語」を興行した際の記録。蠟燭が次々と消される中での狂乱の一夜が生々しく記されている。結局、変化の物は現れなかったが、彩色を施した妖怪が描かれる。絵は南洋（すみ丸）とその息・虎岳。序文は城戸千楯、跋文は、すみ丸。江戸の『狂歌百鬼夜行』（天明5年(1785)）を意識したもの。

江戸時代は多くの妖怪たちが可愛く図像化され、そのキャラクターが現代にまで及んでいる。百物語が流行し、怪談がさかんに作られ、百鬼夜行も広く知られるようになり、多くの妖怪本が出版された。本展示では、上方の『狂歌百鬼夜興』に描かれる妖怪たちを楽しんでいただきたい。

### コーナー⑤ 近世和歌資料 — 鈴鹿連胤と香川景樹（桂園派） —

連胤は香川景樹の門人であり、『百首異見』（文政6年(1809)刊）に序文を書いている。三七も桂園派の和歌資料を蒐集したが、『百首意見』は初版では「連胤」が「正五位下行神祇権大祐兼筑前守中臣連胤」とあったものが、再版では「正五位下行」が削除されている善本ではない本を所有している。また連胤『あしたの露』が『桂園叢書』第3輯に収められているが愛媛大学鈴鹿文庫にはない。しかしながら多くの桂園派の草稿や詠草が所蔵されている。これらの草稿類が三七の手に帰した理由は不明ながら、恐らくは購入したものではなく連胤関係の一部を譲渡されたものだと思われ、優品も少なくない。

#### 1 『桂園宗匠撰草稿』 写本3冊

連胤の和歌が52首（内、恋歌32二首）採られている。須川信行翁手沢本。明治44年8月19日写。須川は和歌を渡忠秋などに学び、向陽会の教師を務め、御歌所寄人となる。大正5年御歌所内におかれた明治天皇御製臨時編纂部委員になる。

#### 2 『詠草抜書』 写本2冊

鈴鹿文庫には、添削のある和歌資料が数点ある。展示品は、ひとつには「天保十五辰年高橋正賢主より愚詠染筆望候節書抜遣候。愚詠之内書抜」、もうひとつには「高橋正賢主染筆望候二付為内覧書候案」とある。高橋正賢は香川景樹の門人。朱による添削がある。

### 3 『桜十番歌結』 写本1冊

赤尾可官は林丘寺宮家家司、閑院宮美仁親王に歌を学び、後に景樹の門人となった。木下幸文を景樹に紹介した人物として知られている。その自筆資料が鈴鹿文庫には若干ある。展示品は、文化3年(1806)3月15日、初めて幸文と景樹が歌合を興行したもので、評者が可官である。この『桜十番歌結』は『桂園叢書』第2輯に収められるが、鈴鹿本とは本文に異同があり、鈴鹿本の方が意味が通る箇所がある。さらには、後の書き込みもあり、愛媛大学図書館鈴鹿文庫本の方が資料性が高い

### 4 『都のつと』 写本1冊

文久3年(1863)成。大和高田の堀江宗之が都を去る際に作成されたもので、連胤も和歌を寄せている。本書に詩文、和歌、句、画を寄せたおもな人物について略述する。

序を与えた六人部是香は平田篤胤門の重鎮にして、歌学に長け、物集高見などを指導した。景恒は景樹の長男、有節は関西旧派俳人の大御所である。種松は谷森善臣、千益は東寺の公人で景樹門の疋田翠雨である。翠雨は後藤松陰門で、柳川星巖に漢詩を学び家塾を開いていた。淡節は伊予松山の人、梅室門。延之は歌学教授河本延之、景嗣は五世梅月堂、忠秋は景樹門の渡忠秋で歌道御用掛をつとめた。蓮茵は和歌に長じた高樹院の拝郷蓮茵、祐以は福田美楯の次男で京須賀社中の歌会を営んだ赤松祐以、多豆伎は河内の歌人中西多豆伎。

#### 【おもな参考文献】 (和暦で統一した)

鈴鹿三七『異本今昔物語抄 附鈴鹿連胤略伝』(大正9年)

安田章編『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』(京都大学学術出版会、平成9年)

「人物列伝21 鈴鹿三七」(『皇學館学園報』46号、平成25年10月)

福田安典「愛媛大学鈴鹿文庫・鈴鹿連胤関係資料について」

(『国文学研究資料館紀要』28号、平成14年2月)

吉海直人「大和文華館所蔵 和古書目録」(『学術研究年報』42巻、平成4年3月)

福田安典「愛媛大学鈴鹿文庫と近世和歌」(『島津忠夫著作集』月報、平成17年12月)

西田正宏「大和文華館の鈴鹿文庫」

(『上方文化研究センター研究年報』15号、平成26年3月)

川平敏文『徒然草の十七世紀』(岩波書店、平成27年)

川平敏文『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』(平凡社選書、平成15年)

川平敏文『近世兼好伝集成』(平凡社東洋文庫、平成15年)

『鴨長明全集』(貴重本刊行会、平成12年)

- 島津忠夫、加賀元子、田野村千寿子『真字本 方丈記 影印・注釈・研究』  
(和泉書院、平成6年)
- 柳瀬一雄『鴨長明研究』(加藤中道館、昭和55年)
- 佐竹昭広「方丈記管見」  
(『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』、岩波書店、平成元年)
- 河原木有二「略本方丈記をめぐる試論」(『二松』4号、平成2年3月)
- 『国文学研究資料館創立40周年特別展示 方丈記800年記念』(平成24年)
- 手塚政男『方丈記論』(笠間書院、平成6年)
- 新家こずえ「愛媛大学附属図書館鈴鹿文庫蔵『伊勢物語かるた』解説と翻刻」  
(『愛文』19号、昭和58年7月)
- 夫木和歌抄研究会編『夫木和歌抄 編纂と享受』(風間書房、平成20年)
- 兼清正徳『木下幸文の研究』(風間書房、昭和49年)
- 吉田神社編『吉田叢書』(内外書籍株式会社、昭和15年)
- 『神道大系 論説編 卜部神道』(神道大系編纂会、昭和60年)
- 『神道大系 論説編 吉川神道』(神道大系編纂会、昭和58年)
- 『中世神道論』(日本思想大系19 岩波書店、昭和52年)
- 小川剛生『兼好法師 徒然草に記されなかった真実』(中公新書、平成29年)
- 鈴鹿三七「黒川道祐著日次紀事印刊考」(『皇學館大学紀要』5号、昭和42年1月)
- 中野三敏『江戸狂者伝』(中央公論新社、平成19年)
- 大坪利絹『百首意見・百首要解』(和泉書院、平成11年)
- 「鈴鹿家と小原家文庫」(『皇學館大学神道研究所紀要』25号、平成21年3月)
- 佐伯真一「翻刻・紹介『倭国軍記』」(『青山語文』44号、平成26年3月)
- 『神道大系 増穂残口』(神道大系編纂会、昭和55年)
- 鈴鹿三七「新選字鏡に就て」(『典籍』第3号、大正4年9月)
- 川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』(雄松堂出版 昭和61年)

(監修・文責 福田安典)

鈴鹿文庫貴重書展実行委員会

神楽岡 幼子

小助川 元太

田中 尚子

福田 安典